

「 武 士 道 」

香 山 美 紀

1. はじめに

騎士道とはそれ自身人生の詩である。 シュレーゲル 「歴史哲学」

太平洋の彼方、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学のキャンパスの一角に、新渡戸稲造記念公園がある。この庭園は、1935（昭和10）年カナダに住む日系人がビクトリアで亡くなった新渡戸稲造を偲んで、高さ4メートルの巨大な石灯籠と、小さな日本庭園を贈ったのがはじまりである。その当時は日加両国の友好のシンボルとされ、盛大な受納式がとりおこなわれた。「アメリカの新渡戸稲造」によれば、

しかし、この石灯ろうと日本庭園が友好のシンボルであったのは、ほんのわずかな間でしかなかった。

太平洋をはさむ日米関係が険悪になるにつれて、日本庭園は荒れるままに放置され、野ざらしになった石灯ろうは、日米開戦とそれに続くカナダ参戦のあとは、反日、排日のシンボルとなっていった。日本庭園のあたりは日本の軍艦に照準をあわせた砲台と変わった。

石灯ろうと日本庭園が、平和と友好の記念としてよみがえったのは昭和34年（1959）のことである。⁽¹⁾

戦後真の国際人として日本のために尽くした新渡戸稲造を慕う日加協会、

カナダ在住の日系人などによって総計七万ドル、(約二千五百万円)の基金が寄せられた。新渡戸稲造記念公園は、ノーマン・マッケンジー大学長、田辺バンクーバー領事の構想に添って、再建された。新渡戸稲造記念公園の脇には、アジア・センターがある。

新渡戸稲造の肖像が五千円札に印刷されることになった時、多くの人が新渡戸という人物について知らなかったという。国際連盟事務次長、東京女子大学初代学長であり、太平洋戦争以前の日米の相互理解に尽力された国際人である。新渡戸稲造は1862年、盛岡の南部藩士の三男として生まれた。札幌農学校、東京大学に学んだ後、アメリカ・ドイツに留学し、英語に堪能であった。実際、この「武士道」も原作は英文である。アメリカのクエーカー教徒の思想に共感して改宗し、1891年、当時はまだ珍しかった国際結婚で、アメリカ人のメリー・バターソン・エルキントンと結婚した。女性の教育、地位の向上にも心を傾け、女学校の設立などの功績がある。1933年、日米関係が悪化しつつある時にカナダのバンフで行われた太平洋会議に出席、ビクトリアにて没す。国際連盟事務局次長として、本を代表する国際的な知識人であり、また札幌農学校教授、第一高等学校校長、京都帝大法科大学教授、東大教授、東京女子大学学長として、熱心な研究者、教育者でもあった。海外の知識人の間ではよく知られた日本人である。外国で有名な日本人は日本では無名であり、日本で有名な日本人は海外では知られていないというのは、おかしな現状である。私は幸運にも新渡戸稲造が留学したアメリカのジョンズ・ホプキンス大学で、二年間勉強することができた。そして私にとって大先輩であり、太平洋の架け橋にならんとした新渡戸稲造について研究したいと願うようになった。

「武士道」は、日本の武士道と西洋の騎士道の比較研究であり、外国人や日本の思想体系を理解してもらうために書かれた。しかし現代社会では、日本の伝統やしきたり、武士の嗜みは、忘れ去られている感があり、「武士道」は外国人のみならず、日本人にとっても教育的であり魅力的であると思う。

2. 武士道の道徳体系

新渡戸稲造は西洋の歴史、文学を引用して武士道を海外に紹介している。外国人に日本のことを伝えるのには、まず相手の言語、文化、習慣を理解しなければならないという考え方である。そして相手の言葉でわかりやすい例を引きながら、語っていく。実際、日本のことを日本人にわかるように話しても国際交流にはならないというものである。日本のことを外国人の観点から説明する必要がある。それを理解していた新渡戸は、広い視野を持った国際人であるといえよう。経済的にも政治的にも国際化している現代に比べ、はるかに各国間の文化的差異の大きかった時代に、格調高い英語で日本の特質について説明できる人物は貴重な存在である。

では日本人を一つの国にまとめている思想とは何なのだろうか。その理想的な姿が武士道ではないかと私は考える。現代の日本社会には欠落してしまっている、古き良き時代の日本の侍たちの生き方である。宗教でも、愛国心でもなく、日本をまとめている暗黙の不文律である。

新渡戸稲造の武士道の定義は以下の通り、西洋の騎士道と東洋の武士道を対比させたものだ。

私が大ざっぱにシヴァリー Chivalry と訳した日本語は、その原語に於いては騎士道といふよりも多くの含蓄がある。ブシドウは字義的には武士道、即ち武士がその職業に於いて又日常生活に於いて守るべき道を意味する。一言にすれば『武士の掟』、即ち武人階級の身分に伴ふ義務である。⁽²⁾

武士道は成文法ではなく、これといった文書がある訳ではない。仏教、神道、孔子、孟子の教えに源を発し、封建制度と共に成立し、武士によって守られ、実践された教えである。封建制度が定着すると武士階級が勢力を得た。士農工商という社会制度の中で戦闘を職業とする侍たちは、行動の規律の必要性

を感じたであろう。武士は武士としての尊厳を持って、文武の道に励んだのである。

サムライ、ハラキリ、キモノといった日本語は既に英語の語彙となって辞書にも載っているが、新渡戸はブシドウをそのまま英語にして使っている。翻訳語を選ぶ際、民族的な特殊性の強い言葉は、原語のまま残した方がよい場合がある。武士道という言葉は、Chivalry では写しきれない独特の持ち味がある。

新渡戸が生き抜いた江戸時代後半から明治時代にかけては、封建社会も末期であり、従来の封建的な武士はもう存在しない。そこで、彼の描く武士道は、理想化された道徳的原理であるきらいがある。例えば、落ちぶれて商業に手を出す武士もいたことは事実である。しかし「武士道」に現れる武士は、商業には関わらない。

人生に於ける凡ての大なる職業中、商業ほど武士と遠く離れたるはなかった。商人は職業の階級中、士農工商と称して、最下位に置かれた。武士は土地より所得を得、且つ自分でやる気さえあれば素人農業に従事することさへできた。併し乍ら帳場と算盤は嫌悪せられた。⁽⁹⁾

続いて、武士道のいくつかの観念について論じてみたい。全てを詳細にわたって説明するのではなく、興味深い点を以下の通り絞り込んだ。①義理、②仁と礼、③忠義、④自制心、⑤教育と女性、である。

① 義 理

義理は最も厳格なる教えとして、「武士道」の中で一番最初に取り上げられている観念である。武士にとって卑劣であることほど恥ずべきことはなく、虚偽を戦略として用いることは禁じられていた。新渡戸は義理という言葉の成り立ちについて以下のように考察している。

『義理』の本来の意味は義務に外ならない。而して『義理』といふ語の出来た理由は次の事実からであると、私は思ふ。即ち我々の行為、たとへば親に対する行為に於て、唯一の動機は愛であるべきであるが、その欠けたる場合、孝を命ずる為めには何か他の權威がなければならぬ。そこで人々はこの權威を『義理』に於て構成したのである。彼等が『義理』の權威を形成したことは極めて正当である。何となれば若し愛が徳行を刺激するほど強烈に働かない場合には、人は知性に助けを求めねばならない。即ち人の理性を動かして、義して行為する必要を知らしめねばならない。同じことは他の道徳的義務についてもいえる。義務が重荷と感ぜらるるや否や、直に『義理』が介入して、吾人のそれを避けることを妨げる。『義理』をかく解する時、それは厳しき監督者であり、鞭を手にして怠惰なる者を打ちてその仕事を遂行せしめる。⁽⁴⁾

義理という言葉はもともと正義の道理を意味していたが、時代を経るにつれて個人の、両親や社会に対する義務となった。するといろいろ問題が生じてくる。年長者は能力に関わらず尊ばれ、愛情に関わらず敬われる。生まれによる階級差別が義理によって、確立される。長男を助けるために他の子供が犠牲にされるという一例を、新渡戸は挙げている。そして勇気という教えを伴わなければ、義理という名義のもとに偽善がはびこったであろうと結んでいる。この一節からもわかるように、「武士道」は一方的な日本礼賛ではなく、その視点は非常に客観的であり、論理的である。

② 仁と礼

仁は慈愛であり、寛容、憐憫の情である。新渡戸の言葉によれば、正義を男性的とすれば仁は女性的な優しさを持つ教えである。正義と仁のバランスが肝要であるということは、伊達政宗の「義に過ぐれば固くなる、仁に過ぐれば弱くなる」という格言が如実に示している。盲目的な愛情に溺れるのではなく、ただ武力を行使して殺戮を行うのではなく、情けをもって正義を行

うのが武士の道である。平家物語に鎌倉初期の武将、熊谷直実がうら若い平敦盛を逃がそうとするが、味方の兵が近づきやむなく念仏を唱えながら若武者を討ちとる話がある。その後熊谷は凱旋するが、勲功名誉を捨てて出家する道を選ぶのである。この逸話によって、武士の情けがいかに関心を感動させたかを理解することができる。

礼もまた武士に欠くことのできない嗜みであった。近年はあまり聞かれないうが、日本人は親切で礼儀正しさと外国人の観光客によく言われたものである。武士の礼儀作法は、茶道に代表されると思う。千利休によって完成された茶の湯の体系は、ほとんど芸術の域に達していると新渡戸は書いている。俗世の戦い、喧騒から離れた茶室で心の平静を取り戻し、清楚な掛け物を見て精神修養する。戦国の世に発達した茶道は、武士の洗練に不可欠であった。新渡戸は次のように武士と茶の湯について記している。

茶の湯に列なる人々は、茶室の静寂境に入るに先だち、彼等の刀と共に戦場の凶暴、政治の顧慮を置き去って、室内に平和と友情とを見出したのである。⁽⁶⁾

礼についての具体的な日米間の差異として、新渡戸は贈り物をする場合について興味深い例を引いている。それは以下引用した通りである。

我国礼法によって定められて居る習慣の中「おそろしくをかしい」例を、も一つ挙げよう。日本についての多くの皮相なる著者は、之をば日本国民に一般的なる何でも倒さまの習性に帰して、簡単に片付けて居る。この習慣に接したる外国人は誰でも、その場合適当なる返答を為すに当惑を感じずることを告白するであらう。他でもない、米国で贈物をする時には、受取る人に向かつてその品物を賞めそやすが、日本では之を軽んじ賤しめる。米国人の底意はかうである。「之は善い贈物です。善いものでなければ、私は敢えて之を君に贈りません。善き物以外の物を君に贈

るのは侮辱ですから。」之に反し日本人の論理はかうである、「君は善い方です、如何なる善き物も君には適はしくありません。君の足下に如何なる物を置いても、私の好意の記として以外にはそれを受取給はないでせう。この品物をば物自身の価値の故にでなく、記として受取って下さい。最善の贈物でも、それをば君に適はしきほどに善いと呼ぶことは、君の価値に対する侮辱であります。」この二つの思想を対照すれば、究極の思想は同一である。どちらも「おそろしくをかしい」ものではない。米国人は贈物の物質について言ひ、日本人は贈物を差出す精神について言ふのである。(6)

「粗品」という言葉ほど翻訳しにくいものはない。アメリカ人に「つまらない物ですが。」と言って贈り物をしたら、つまらない物ならなせくれるのだろうかと怪訝な顔をされるのが落ちだろう。その微妙な文化的差異を新渡戸は鋭く突き、アメリカ人にもわかるように、日本人の心理を解きあかしている。非常に大切なことは、この日米間のギャップを単にさかさまだと決めつけているのではないということであろう。日本の車が右ハンドルで、アメリカが左ハンドルだという相違とは異なり、文化的な差異は表面的には全く正反対のように見受けられるが、実は相手の気持ちを思いやる心は世界共通なのである。「粗品」という言葉を明確に英語で説明できるのは、現代の国際社会に生きる私たちにとっても至難の業ではないだろうか。それは語学力のみでなく、国際的感覚を必要とする。

③ 忠 義

忠義とは、目上の者に対する服従と忠誠を果たす義務のことである。第九章の忠義の項目を取り上げたのは、ここで新渡戸が日本の武士道と西洋の個人主義について考察しているからである。物語によれば、菅原道真が都から追われて、旧臣の源蔵は若君の命を救うために自らの子を手にかけ、その首を検視の役人に引き渡したという。これが残酷とはいえ、武士の主君への忠

誠である。武士道の忠義は家族の利害をひとつとみなすため、個人の利害は省みない。一方西洋では個人主義により、家族の中にも父と子、夫と妻それぞれに別の利害を認めている。武士道の忠義の教えは、組織を守るために個人に膨大な犠牲を課したわけである。新渡戸が考察する忠義とは、次の通りである。

武士道はアリストートル及び近世二三の社会学者と同じく、国家は個人に先んじて存在し、個人は国家の部分及び分子としてその中に生れ来るものと考えたが故に、個人は国家の為め、若くはその正当なる權威の掌握者の為めに生き又死ぬべきものと為した。⁽⁷⁾

④ 自制心

武士は感情を表にあらわさないように、克己心を高めるよう訓練された。喜怒哀楽の感情をあらわすことは、男性的でなく威厳を損ねることだと考えられた。日本人が無表情だといわれるのは、この自制心に由来するのであろうか。冷静沈着であれば、どんな危機に直面しても解決策を講ずることができる。しかし度を過ぎた自制心は外国人の誤解を生むのではないか。電車に乗り遅れ、閉まる扉の前でニヤッと笑う日本人の不可解さについては、よく話を聞く。失敗した照れを隠す笑顔、苦難に直面して心の動揺を見せない笑顔など、日本特有のものであろう。何事も中庸が肝要ということになる。自制心も過剰になると有害であるというのは、以下の文に説明されている。

克己の修養はその度を過ぎし易い。それは靈魂の潑刺たる流を抑圧することがあり得る。それはすなほなる天性を歪めて褊狭畸型となすことがあり得る。それは頑固を生み、偽善を培ひ、情感を鈍らすことがあり得る。如何に高尚なる徳でも、その反面があり偽物がある。吾人は各個の徳に於いてそれぞれの積極的美点を認め、その積極的理想を追求しなければならぬ。⁽⁸⁾

日本人は個人の心の中で弁証法ができてしまっているというのは、もっともである。外国人は自分の意見を主張し、他人の立場を慮るということはない。ただただ自分の考えの正当性を述べたて、相手を説得しようと躍起になるのである。一方日本人は言葉にしなくても、心の動きを感じる能力があり、相手の気持ちを尊重しながら交渉する。外国人も「武士道」を読めば、日本企業と交渉するのは難しい、訳が分からない、日本は不可解な国だと決めつける訳には行かないだろうと思う。

⑤ 教育と女性

日本とアメリカの教育を比較した場合、最初に目につくのは、教師の社会的地位であろう。日本では「先生」は尊敬と信頼を感じさせる呼称だが、アメリカではもちろん大学教授は立派な社会的地位をもっているが、小・中・高校の教師は薄給で知られ、必ずしも敬われるような職業ではない。日本で教師が尊敬されるようになったのは、どんな経緯からなのだろうか。それを新渡戸は次のように分析する。

知識でなく品性が、頭脳でなく靈魂が琢磨啓発の素材として選ばれる時、教師の職業は神聖なる性質を帯びる。「我を生みしは父母である。我を人たらしむるは師である。」この觀念を以てするが故に、師たる者の受くる尊敬は極めて高くあった。かかる信頼と尊敬とを青少年より喚び出す程の人物は、必然的に優れたる人格を有し且つ学識を兼ね備へて居なければならなかった。彼は父亡き者の父たり、迷へる者の助言者であった。語に曰く、「父母は天地の如く、師君は日月の如し」〔実語教〕と。⁽⁹⁾

新渡戸は教育論を講演することがあったが、その見解は現在討議されている教育改革にも活用されるべき立派な内容である。教育者としての新渡戸稲造も評価されなければならない。ここに彼の言葉をいくつか引用したい。

「大学は偉大な人格に接する所」、「大学は職業を授ける所に非ず」、また「専門だけの専門家は、人間としては片輪である」、「学問の目的は、高等なる判断力を養ふこと」⁽¹⁰⁾

武士の教育が品性の確立、智・仁・勇に基づいて行動する訓練であったとすれば、女性の教育はどうだったのであろうか。「武士道」で理想的とされる女性像は、「婦」という漢字が箒をもつ女性から成り立っていることから、家庭的なことだと説明されている。武家に生まれた女性たちは、男性と同じように武芸を行うこともあったが、実際に使うことは稀であった。封建社会の女性にとって大切だったのは、剣術ではなく、音楽、舞踊、文学などの芸事だった。女性の生涯の務めについて、新渡戸は次のように紹介している。

我が婦人の芸事は見せる為め、若しくは出世の為に学んだのではない。それは家庭の娯楽であった。社交の席にてその技を示すことがあっても、それは主婦の務めとして、換言すれば家人が客を歓待する方法の一部としてであった。彼等の教育の指導精神は家事であった。旧日本婦人の芸事の目的は、その武芸たると文事たるとを問はず、主として家庭の為めであったと言ひ得る。彼等は如何に遠く離れさまよふても、決して炉辺を忘れることはなかつた。彼等は家の名誉と体面とを維持せんが為めに、辛苦勞役し、生命を棄てた。日夜、強く又やさしく、勇ましく又哀しき調を以て、彼等はおのが小さき巢に歌ひかけた。娘としては父の為に、妻としては夫の為に、母としては子の為に、女子は己を犠牲にした。⁽¹¹⁾

ここでは女性の自己犠牲の精神についてしか述べられていないが、武士道の教えは男女共に義理、忠節の為の自己犠牲を強制している。そこでただ女性だけが封建社会で虐げられた存在であったとはいえない。女性と男性の平等とって、比較する尺度とは何かと新渡戸は尋ねる。金の価値と銀の価値

を比較するようなものを、その重量で数字的に計算してしまってよいだろうか。現代社会において男女の平等という話題が頻出するが、金と銀の価値は相対的にしか測れないということを知った人はどれだけいるだろうか。時代を超え、女性の社会的地位についての新渡戸の立場は、今なお真実であると思う。

3. 文体・構成について

「武士道」が執筆されることになった経緯については、「武士道」の序章に記されている。ベルギーのド・ラヴレー氏に、日本に宗教教育がないとすれば日本人に道德教育はないのか、と質問され、新渡戸稲造は自らの道德観念が学校教育で教えられたのではないとすれば、どこから来たのかと考えるようになった。幼年時代に教えられた善悪の価値判断は、学校で習ったのではなく、武士道として代々伝えられてきた道德観念だった。それをメリー夫人に語るうちに、一冊の書物としてまとめることになったのが「武士道」であった。

新渡戸がアメリカ・ドイツに海外留学した頃の日本は、経済大国の足元にも及ばない、後進国であった。アメリカにおいて日本の文化や歴史は全く知られていないことに、彼は驚き、日本の存在を世界に示す必要性を感じたに違いない。留学によって英語を習得し、西洋史、西洋文学、西洋哲学にも通じていたのが幸いし、「武士道」は英語によって執筆され、外国人にわかりやすい物語をちりばめながら、武士の生きざまを紹介している。

「武士道」の原作は、カーライルの文体で書かれ、非常に難解である。ギリシャ・ローマ時代の哲学者や、聖書、シェイクスピア、エマソンまで、西洋によく知られた知識人が現れる。新渡戸稲造の描く武士道は、古き良き昔を追想し理想化した、侍たちの生き方である。アメリカのみならず世界に紹介するために、日本の精神は、香り高く気品のある文章で説明されている。「武士道」の書き出しは、特に美しく、多くの読者を魅了するであろう。

武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。それは古代の特が乾からびた標本となって、我国の歴史の腊葉集〔押花帳〕中に保存せられてゐるのではない。それは今尚我々の間に於ける力と美との活ける対象である。それは何等手に触れ得べき形態を取らないけれども、それに拘らず道徳的雰囲気を香らせ、我々をして今尚その力強き支配の下にあるを自覚せしめる。それを生み且つ育てた社会状態は消え失せて既に久しい。併し昔在って今は在らざる遠き星が尚我々の上にその光を投げて居るやうに、封建制度の子たる武士道の光は母たる制度の死にし後にも生き残って、今尚我々の道徳の道を照らして居る。⁽¹²⁾

新渡戸の著作のうち、日本語での作品には、学者向けではなく大衆向けと思われるようなものもあるが、「武士道」は特に難しい文体と堅い形式をとっているようである。それは何故だろうか。アメリカ・ドイツに留学した新渡戸は、日本に対する西洋人の知識の欠落に愕然とし、日本の心を理解してもらうためには、まず西洋のエリートを対象に書物を書かなければならないと考えた。日本のことが全く知られていないのに、外国の一般国民に話をしてあまり意味がない。一番有名で影響力のある、大統領や首相、学者に語りかけるには、高い水準で洗練された構成が必要である。日本にはこんな素晴らしい思想と道徳観があるのだ、と胸を張って世界の知識人に対して語りかけているのである。

4. 結 論

「武士道」が書かれた究極の目的は、新渡戸稲造の生涯に於ける志につながっていく。「帰雁の蘆」の第一話は、「洋行の動機」と題され、彼の人生の目標がはっきりと記されている。以下はその解説からの抜粋である。

第一話は「立志」とも題すべかりし挿話である。第一話は新渡戸の洋行

前の話から始まる。彼が札幌農学校を卒え、二十一歳のとき東京帝国大学に入学したさい、外山正一教授と会談した。「貴下何をやる積りです」と尋ねられ、「はい農政学をやり度いと思ひますが左様云ふ学問は未だ無い相ですから、せめてはその参考ともなるべき、経済、統計、政治学をやり度いと思ひます。詰りは農政学を以て私の専門とし度いのですけれ共、実は私に一つの道楽がご座居まして、下手の横好きで、今迄も時さへあれば見ておりますが、英文学も序でに大学で習い度いと思ひます」「英文やつて何します。」僕は笑いながら「太平洋の橋になり度いと思ひます」と云ふと、外山先生は少しく冷笑的に「何の事だか解らない、何の事です。」と問ひ尋された。其処で不得止説明して「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度いのです」と述べた。⁽¹³⁾

この一節から新渡戸が太平洋の橋とならんとしたのは、21歳という非常に若い時の決意なのだということが伺える。農政学を勉強するかたわら、外国人に日本のことを伝えたいという思いは日に日に強まっていったのであろう。今でこそ多くの若者が留学できる時代となったが、新渡戸の時代に海外で学ぶことのできる日本人はごく少数であった。エリートの国際交流を進めるのが、新渡戸のライフ・ワークであり、人生の目的であった。彼の理想像は、単なる学者ではなく、教養と良識を備えた知識人であったと思う。留学の経験により、新渡戸は広い世界的な視野をもって日本の将来を考えることができたのである。日本では未だに、一流の政治家でさえ英語で討議し交渉できる人材が不足している。新渡戸のような東洋と西洋の両方を理解した知識人が、日本の将来のために必要であると考えた。

1933（昭和8）年、新渡戸稲造は郷里の岩手県を訪れ、岩手県産青連総裁に就任する。その時彼が色紙に記した言葉を、次に引用する。

郷里を訪れるのはこれが最後という意識があったのであろうか。それと

も稲造には、死の予感があったのであろうか。その後の稲造の運命を思うと実に意味深長なものを感じさせられる内容のものであるが、その「色紙」の文面についてのちに、黒沢喜一郎は岩手日報主筆後藤清郎に、これが郷里の産組人に残した遺言になったと語っている。「色紙」の表には「衆の為に努むるを生命といふなり 死とは何事もせざるの意なり 己れを棄つるは是れ生命の始なり」と書かれている。裏には英文で

「To live is to work for others: to die
is to do nothing. Self renunciation is
the beginning of Life. Inazo Nitobe」⁽⁴⁾

新渡戸稲造の世界観は、決して東洋偏重でも西洋偏重でもなく、非常に寛大で心の広い価値観である。太平洋戦争以前には、太平洋問題調査会理事長となり、日米中関係の改善に心を砕いた。「太平洋の橋」として、海外における対日理解に尽力し、太平洋会議の最中にカナダで倒れる訳だが、それはまさに彼の意とした人生だったのかも知れない。東洋と西洋の調和と一致という新渡戸が理想とした世界秩序に命をかけ、「己れを棄つるは是れ生命の始なり」という言葉通りの人生を終えたのであった。

5. おわりに

本論を作成するにあたって、学習院大学の小林善彦教授に数々のご教示を賜りました。長年の懸案であった新渡戸稲造研究を軌道に乗せていただいたことに、厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 佐々木篁「アメリカの新渡戸稲造」熊谷印刷出版部 昭和60年 218-219頁
- (2) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 30頁
- (3) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 65-66頁
- (4) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 43-44頁
- (5) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 61頁
- (6) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 67頁
- (7) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 79頁
- (8) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 91頁
- (9) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 85-86頁
- (10) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第六巻」教文館 昭和44年 658頁
- (11) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 111-112頁
- (12) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第一巻」教文館 昭和44年 29頁
- (13) 新渡戸稲造「新渡戸稲造全集 第六巻」教文館 昭和44年 652頁
- (14) 内川永一朗「晩年の稲造」 岩手日報社 昭和58年 207頁